

奈良猿沢池畔の「陶芸きらら」の店



エッセイ

「きららの里」

小柳いすず

平成28年



垂水のおばあちゃんが  
眠る十輪院

柳生焼窯元井倉柳生堂展示場・休憩室



旧柳生藩家老屋敷（現在、柳生資料館）



# 〳〵きらら〳〵の里

小柳いすず

二人とも、もう私の事など覚えていないかも知れない。五十数年も前の事だし、わずか数カ月間住み込みの家庭教師としてお世話になっただけの縁に過ぎない。

小学生の男の子の「大きい姉ちゃんは、僕らのお陰でご飯が食べられるんやで、儲かっ  
てんなあ！」とか、「姉ちゃんは自分の勉強ばかりしてずるいわ」などの言葉に耐えかね  
て飛び出してしまった苦い思い出もある。

今更会って、現在どうしているのかを知りたいと願うのは、私の身勝手だろうか。極端  
に言えば、私は、一日たりとも忘れたことはない。「あの頃は世間知らずの未熟者で、お  
宅を飛び出してしまったことを、長年申し訳なく思っていました」と一言伝えたいのだ。

ところが、平成二十七年五月、奈良ホテルで〳〵大学卒業五十周年記念同窓会〳〵が催され  
ることとなり好機到来と喜んだ。しかし、電話局に問い合わせをしたのだが、何と昔の住  
所辺りに垂水家はなかった。さらに、市内に垂水履物店は存在しなかったのだ。もう、諦  
めなさいということだろうか。

若葉・青葉の輝く五月の佳き日、ホテルでの心華やぐ同窓会を終えると、十数名で思い  
出の母校を訪れた。しかし、緑陰での心弾む語りもそこそこに失礼した。「このままで  
は帰れない」との思いが突き上げ、垂水家の消息を求めて猿沢池の畔を訪ねた。

昔の佇まいそのままに、土産物店は並んでいた。修学旅行者も途絶えており、たまたま  
店先に出てきた女主人らしき女性に尋ねた。

「昔、垂水さんご夫妻が履物店を出しておられたのですが、ご存知ありませんか」

彼女は雨戸の閉まった店を指さしながら、

「今日は閉まっています。今は、〳〵きらら〳〵という土産物店になっていますよ。子ども  
たちが店をやっています。母親は入院中で……」

「えっ！ 子どもたちがお店を！ それに、お母さんは御存命なんですね！ 私、五十数  
年前に家庭教師でお世話になっていた者です」

「私は、子ども達の叔母です。昨日は店を開けていたんですがねえ」と気の毒そうに。

何という奇遇か！ 叔母と名乗る女性は、店に戻って商店街名簿を繰って、現在の垂水  
家の住所と電話番号を教えてくれた。

数日後、喜びと不安が交錯するなか、電話をかけた。

「昔、家庭教師としてお世話になりました旧姓安部と申します。当時は世間知らずの未熟者で、お宅を飛び出してしまい、ずっと申し訳なく思っていました。先日、同窓会がありました、奈良に行ったものですから……」

叔母さんから聞いていたのだろう、「その節は、わざわざお寄りいただき有難うございました。安部さんのこと、覚えていますよ。確か、小倉でしたね。夏休みには沢山お土産を有難うございました。珍しい切手もいただき、それ、今でも持っていますよ。安部さんが出て行かれた経緯は、僕はまだ幼かったもので、何も知らないんです」

わずか数カ月の出会いにすぎない私のことを覚えていてくれた。しかし、私が出て行った経緯については全く覚えていないようだ。

「現在の苗字は？どこにお住いですか？」と彼の質問は続き、私の質問にも応えて、入院中の母親の事、二十年ほど前に亡くなった父親の事、定年まで勤めた仕事先のこと。姉も本人も結婚して、それぞれ二人の子どもに恵まれていること。彼の娘は大阪の芸大を卒業し、陶芸家になっていることなどを縷々語ってくれた。

「娘の夫も陶芸家で、まあ、二人を助けるために、この店を開いたようなものです。自分は今全くその方の知識はありませんが」と。

土産物店〳きらら〳は陶芸の店だったのか。

「お店のお忙しいお時間に、長々とすみませんでした」と恐縮する私に、「いえいえ、全く暇ですよ」と。

携帯番号を交換して会話は終わった。

「久しぶりで懐かしいお声を聞き、皆さまの様子も分かり嬉しく思いました。どうぞお母様をお大事に」と初めてのSMSショートメールを送った。

「こちらこそ、懐かしい方から連絡頂き大変嬉しいです。なにぶん遠方ですが、母親の元氣な間に奈良にお越しく下さい。本当に待っています！」との返信。

嬉しかった！立派な、心遣いの優しい紳士になっていた。込み上げてくる心華やぐ喜びとともに、後悔が押し寄せた。

子どもは聞き耳頭ききみみずきんと言われるが、大人の不用意な言葉を真似て、得意気に繰り返していただけなのだろうか。その言葉が、世間知らずの小娘の私には耐えがたかったのだ。

思わず、垂水家を出る時のおばあちゃんの溜息混じりの言葉が蘇った。

「こんな小ちゃん子の言うことを真に受けるやなんて、難儀な姉ちゃんやなあ」

今なら、おばあちゃんの言葉が多少は解るのに。今となっては、五十年余りも拘くだわりを持ち続けていた事自身が申し訳ない限りである。

「母親の元気な間に奈良にお越しください」との弘さんの言葉が重かった。奈良に行ってきたばかりである。しかし、訃報を受けてからでは遅い〳〳という焦りは拭えなかった。当つくばみらい市では、九月初めに隣接する常総市の水害による避難者を受け入れた。十月十日で受け入れ終了とのこと、それを機に、奈良行きを決心した。週末は多くのボランティアが参加し、人手が足りることから、十月十日土曜日に奈良行きを決めたのだ。

弘さんが営む陶芸店〳きらら〳は、何と柳生焼窯元の店だった。ネット等で調べると、剣豪の里に今なお息づく柳生焼は、柳生十兵衛の祖母春桃御前しゅんとうごぜんが孫の安全を願でい木偶人形を焼いたことに始まる、とある。江戸時代に一度は途絶え〳〳幻の焼き物〳〳と言われたが、明治になって井倉家が研究に明け暮れ再興した。二代で焼成に成功。現在は三代目井倉敏夫氏が春桃御前の窯跡で焼き継いでいるとのこと。

弘さんの長女聖子さんも、〳きらら〳の陶芸作家として名を連ねている。同じく大阪芸大を卒業した彼女の夫である幸太郎氏は、三代目井倉敏夫氏の長男にあたり、将来四代目を継ぐ人であることがわかった。

「娘夫婦を助けるために、店を開いたようなものです」との弘さんの言葉の重さがずしんと胸にきた。

やがて、弘さんから大型封書が届き、幸太郎氏と聖子さんのこれまでの作品展の案内などが同封されていた。幸太郎氏はその若さで、独自の境地を開いている。磁器土の特徴の一つ〳透光性〳と透明感溢れる青白磁釉じゆうの美しさを追求した作品である。幸太郎氏の研ぎ澄まされた繊細さを伴う美しさとは対照的に、土の素朴さを生かし、微笑みを誘う聖子さんの作品の数々。全く異なった作風の二人が、同じ窯元で制作に励んでいる姿を想像すると、何とも微笑ましい。伝統の重さも、芸道の厳しさも、この二人なら若さと愛で乗り越えて行かれるのでは、と期待されてならない。

いつの日か、遠くない将来、弘さんのお母さんを見舞う際には、柳生の里の窯元をも訪れ、幸太郎氏と聖子さんに会い、二人の作品とも対面したい、との心踊る夢が生れていた。

いよいよ、お母さんの見舞と墓参り、そして柳生の里への訪問の時が到来したのだ！

当日は、昼前に近鉄奈良駅に到着。昼食を済ませ、陶芸〳きらら〳の店に。柳生焼き独特の暖かさや気品の漂う皿や茶器は、三代目窯元・井倉敏夫氏による作品。青白磁の作品が幸太郎氏によるもの。ほんわりと温かな土物の花瓶等は聖子さんの作品。店の様子をカメラに納めると、弘さんの案内で十輪院の垂水家墓地に向かった。亡きおばあちゃんとお父さんに手を合わせ、駐車場に廻して置いてくれた車で〳佐保の里〳内にあるお母さんの



現在、市の柳生資料館となっている旧柳生藩家老屋敷



柳生焼窯元・井倉柳生堂展示場・休憩室（左手前、体育館風の作業場に続く）

病院へ。お母さんは胃ろうの手術を受けており、痛々しい姿ながら、少しの会話はできた。高齢でこのような状態では、昔の事はおぼろげであろうと思われ、過去のことは私の胸に納めようと決心した。

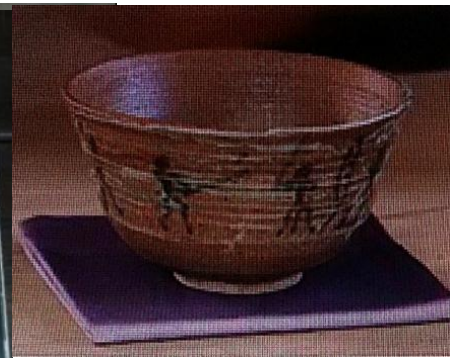
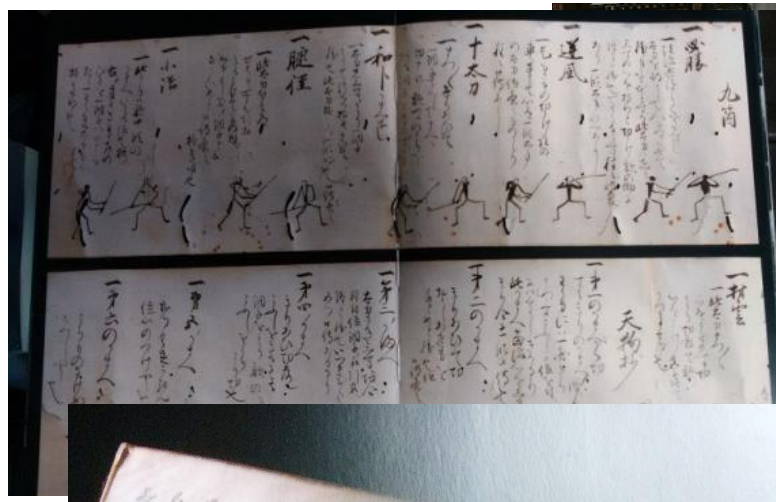
病院を後にすると、再び弘さんの運転で一路柳生に向かった。大自然の懐に抱かれた郷愁を誘う山里である。その街道沿いに柳生焼窯元・井倉柳生堂はあった。

ホームページ  
HPには、店主井倉敏夫・息子幸太郎の作品を觀賞しながら、美味しいコーヒータイムを、との記述があり、楽しみにしていた。弘さんの娘聖子さん、夫の幸太郎氏、氏の母親である三代目夫人が私たちを迎えてくれた。夫人は、私の矢継ぎ早の質問に満面の笑みで答えた。柳生焼きの土が、ゞきららゞと呼ばれるのは、土に含まれた雲母が煌めくから。釉薬の辰砂が、鮮やかなルビー色を出すのは、水銀が含まれていたから。現在では水銀ではなく銅が使用されているらしい。さらに、貴重な柳生十兵衛の兵法書『月の抄』を紐解くと、その絵目録を図案とした器が歴史を物語ってくれた。

現在、市の資料館になっている旧柳生藩家老屋敷をも訪れた。この屋敷は人手に渡っていたが、山岡莊八氏によって買い戻され、氏の遺言によって奈良市に寄贈されたものだ。氏がかつてのNHK大河ドラマ『春の坂道』の原作を練った所でもあった。

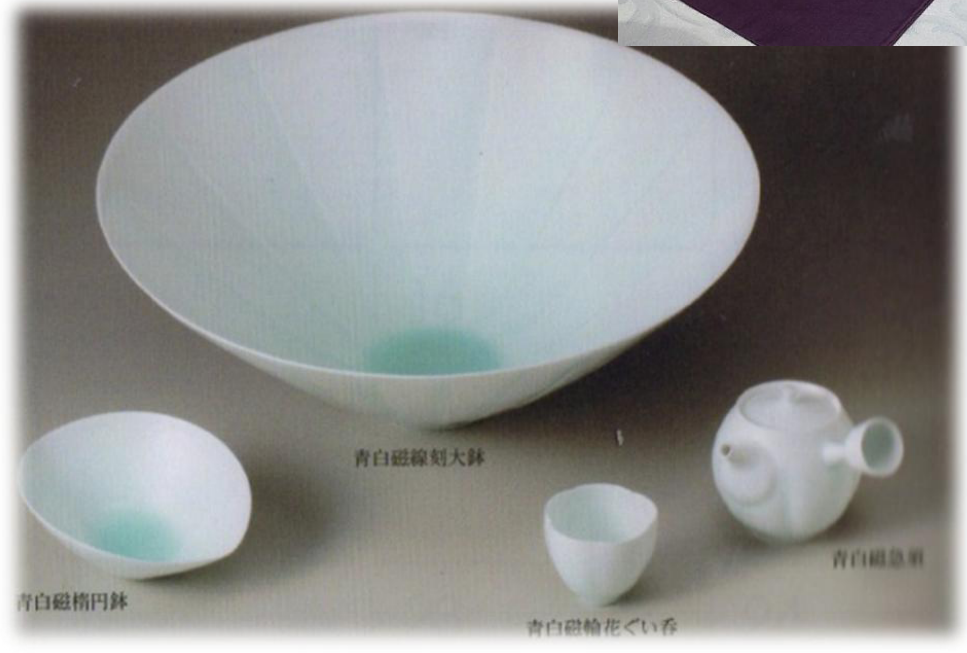
その夜の宿泊を予定していた高槻市の弟から夕食を予約したので早く来るようにとの誘いがあり、弘さんは予定の特急に間に合うように近鉄奈良駅まで私を送り届けてくれ、至福の一日を終えた。

また彼は、空白の五十数年間を埋めるかのように、年代ごとに編集した家族写真を送ってくれていた。長い拘りが、暖かく溶けて、思いも掛けない展開を感謝し享受している。



柳生十兵衛の兵法書『月の抄』の絵目録を図案とした茶器（上）（井倉敏夫作）

上) ホテル椿山荘東京のアートギャラリーに出展された柳生焼平鉢と辰砂の壺（井倉敏夫作）  
下) 井倉幸太郎作の青白磁の器



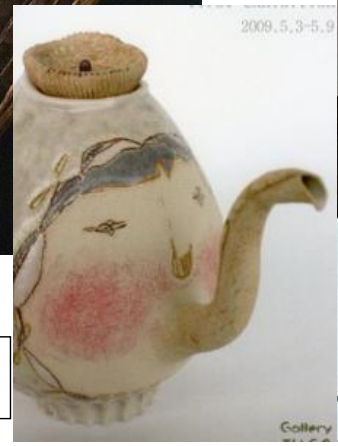
青白磁楕円鉢

青白磁線刻大鉢

青白磁輪花ぐい呑

青白磁急須

右) 聖子さんの作品



Colley